第25回ワークショップ（論文構想発表）

2013年7月17日開催

■資料[1]

大杉 高司「社会主義キューバで「持続可能エコロジー農業」を作成する
——ブラックボックス化の美学と実践的効用」(2013.7)
井川 ちとせ「decontextualized= undisciplined ?」 (2013.7)

I.　社会主義キューバで「持続可能エコロジー農業」を作成する：ブラックボックス化の美学と実践的効用　（報告者：大杉 高司）

■報告要旨

本報告では、現代キューバで展開される「持続可能農業」が、それを取り囲む「広い文脈」と「狭い文脈」の断絶に特徴づけられる点に着目し、この断絶をどのように理解すべきかについて考察を試みた。

「広い文脈」のうち特に注目すべきは、「持続可能農業」プロジェクトに対し、各国政府から国際NGO 経由で流入する財政的援助である。「持続可能農業」に参与するキューバ人の多くは、この援助の不可欠性を認識しているものの、そのことがプロジェクトの「狭い文脈」での成果（すなわち、各農場における収穫の増大）の価値を傷つけるものとは考えていない。しかし、プロジェクトが目指すものが「持続可能性」である以上、外部からのインプットにほぼ全面的に依存したプロジェクトのあり方には、疑義が差し挟まれても不思議はない。アクター・ネット・ワーク論を援用する立場からは、「広い文脈」と「狭い文脈」の断絶は「ブラックボックス化」として批判され、そこに隠されたものを明るみにだすことで、プロジェクトの真の姿をとらえるべきとされるだろう。これに対し本報告では、セカンド・オーダー・サイバネティクスのブラックボックス論を援用しつつ、二つの事例を予備的に分析し、断絶の異なる理解の可能性を提示した。ひとつに、「持続可能性」という特有の希求対象が、サイバネティクスが想定するのと同様の内的閉鎖に特徴づけられており、この前提が、無限にひろがるネットワークの連鎖からの対象の切断（断絶化）を参与観察者に促していること。またひとつには、切りだされた当の対象である「持続可能農業」それ自体が、正確にその中味は把握しがたいものの、とりあえずの取り組みを可能するブラックボックスとして制作される以外ないこと、である。

[1] 資料は、本先端研HP（http://www.soc.hit-u.ac.jp/~decontext/）から入手可能。

最後に、キューバ「持続可能農業」におけるブラックボックスを、浮世絵に影響をうけたフランス・ジャポニスム絵画における中景の不在や、人類学的企図を特徴づける事例と理論の距離と併置し、相互に比較可能な美学を有していることを示唆した。

■ディスカッションの内容

まず、キューバにおいて持続可能性が語られる文脈がどのようなものであるのかを問う質問（井頭）に対して報告者から、環境保護等のグローバルな問題から食料政策といった政治問題やローカルな問題まで、様々な文脈で様々な目的設定とともに持続可能性が語られている、との返答があった。この返答を受けて、関心や目的に相対的に文脈が設定されると想定する、認識関心に注目する状況記述のアプローチを採用すれば、アクター・ネットワーク論（以下ANT）の問題点として報告者があげている、文脈／状況記述の無限性の問題は回避できるのではないかとの指摘があった（井頭）。また、報告者の関心は、異質な目的設定の仕方が様々な局面において併存しているという、一見して非合理に見える状態が、そうであることによって持続可能性をブラックボックス化し、物事を円滑に進めるために機能しているという点にあったのではないかとの発言があった（武村）。これらの指摘・発言に応えて、多様なシステム間（eg. 開発援助のシステムと持続可能農業を作るシステム）のギャップが持つ機能（資金調達の成功—政府による助成獲得、運用側の自由の確保 etc.）について言及があり、キューバではネットワーク分析が詳細に記述しようとする多様なものの間の折衝過程＝〈中景〉が不在化される傾向があり、そうしたブラックボックスの作製様式に関心がある、との返答があった（大杉）。

この返答を受けて、近景と中景におけるそれぞれのブラックボックス化と、中景の不在化により立ち現れる持続可能性そのもののブラックボックス化の三つの議論の問題とする水準が異なることから、論述上の再整備が必要なのではないかという提案があった（武村）。さらに、ANTのブラックボックス論（批判）と報告者の研究の立ち位置に関する質問（井頭）を受けて、ANTの提唱者であるラトゥールや彼の批判対象であるブルデューの議論に共通する暴露趣味的なモチベーションからの距離化を図る関心について、報告者から説明があった。また、キューバの民間信仰でありサンテリアと、本報告で話題となった持続可能農業の作成の間に、報告者が指摘した平行性について補足説明が求められ（深澤）、以下の回答があった。神を物質化／石化するサンテリアの実践にも一種のブラックボックス化や、遠景＝抽象的レベルと近景＝具体的レベルを直結させる発想が見られる。本報告では、そうした平行関係が偶然のものであるのか、それとも遠景と近景を直結させるマトリックスがキューバに存在することを示すものであるのかを考えたかった（大杉）。

II.　decontextualized= undisciplined？（報告者：井川 ちとせ）

■報告要旨

過去２回の井川の報告について簡単な説明をおこなったのち、アメリカのクィア理論研究者ジュディス・ハルバーシュタム (Judith Halberstam) の *The Queer Art of Failure* (Durham: Duke UP, 2011)を、「脱文脈化」とはいかなる実践であるか検討するうえで示唆に富むものとして紹介した。

ハルバーシュタムはかつて、*Skin Shows: Gothic Horror and the Technologies of Monsters* (Durham: Duke UP, 1995) で、非正典的テキストを扱いながら、英文学研究の作法にのっとった高度な精読の技法と先行研究の解釈によって、学術研究として「真面目に受けとめられる」ことに腐心している様子を強く印象づけたが、*The Queer Art of Failure* では、既存の学術分野や方法を、新しい発見の可能性をあらかじめ排除してしまう既存の学術分野や方法を手放すこと（“undisciplined”）を訴える。非正典的テキストを扱う点では、前者と変わりないが、後者は一般読者にも読まれることを期待して平易な文体を採り、「シニカルな諦観かナイーヴな楽観主義か」の二者択一に代わる探求を試みている。

■ディスカッションの内容

ハルバーシュタムが *The Queer Art of Failure* で提示した undisciplined な記述の性格とその方向性に、質問が集中した。まず、どのような作家やテクストが検討対象になるのかという質問があった（武村）。また「真面目に受けとられない」ような undisciplined な記述法の具体像を示して欲しいという要望を受けて（井頭）、発表者から以下のような回答があった。 たとえば、*The Queer Art of Failure* では、人気アニメ（『スポンジ・ボブ』）の引用が冒頭に置かれていること、著者の専門が英文学であるにもかかわらず英文学のテクストが扱われていないこと、そしてachievementではなくfailureに焦点を当てていることなどが、undisciplined な記述法の具体例としてあげることができる（井川）。この返答を受け、ハルバーシュタムのテクストで実際に達成されていることは、discipline の放棄（/undisciplined）というよりも別の discipline への変更——あるいはその可能性を示唆すること——であるように見える、との見解が示された（井頭）。また、*The Queer Art of Failure* における独特な記述法の採用へとハルバーシュタムを動機づけたものが何か——知的・戦略的な差異化を図ろうとする意図があったのが、優位な視点から他者の虚偽意識を暴く態度に対する反発・反動か——を問う、質問があった（深澤）。

議論の終盤で、訓練された知とは相反する知のあり方を示すためにハルバーシュタムが引用したベンヤミンのテクストについて、注釈が加えられた。ベンヤミンの知のあり方の特徴を記述するためにハルバーシュタムが引用した「地図のない通りを“間違った”方向に彷徨い歩く」という文章[2]は、引用者の意図とは裏腹に、ベンヤミンのテクストでは「彷徨い歩くにも何らかの訓練・修練（Schulen ＝英: school）が必要である」ことを含意していたという（久保）。

（了）

[2] 『ベルリンの幼年時代』の連作の最初の作品からの引用。